The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世日本における西国巡礼の展開ー厚誉春鶯『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』を中心にー
Author(s)	Sighinas, Mihaela Lacramioara
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（Sighinas Mihaela Lacramioara）	
論文題名	近世日本における西国巡礼の展開 ―厚誉春鶯『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』を中心に―

論文内容の要旨

巡礼について、星野英紀は「日常的な生活空間を一時的に離れ、宗教の聖地・聖域に参詣し、聖なるものにより近接しようとする宗教行動」と定義しているが、中国でも古くから天台山や五台山への巡拝が発達し、その伝統は中世日本にも影響を与え、特に修行の場としての霊山への巡礼を中心に受け継がれていった。そういった中、衆生救済のために三十三種に変化すると言われる観音菩薩が示現する霊場を巡拝していく「西国三十三所観音巡礼」（以下、「西国巡礼」と略）が形作られてくる。「四国八十八ヶ所遍路」より古くに成立したこの霊場めぐりは、当初、修験者や僧侶に限られていたが、江戸時代には交通網の発展により庶民の参加が可能となり、観光的な要素を取り込みながら、全国的に広がりを見せるのである。もちろん、こういった西国巡礼の社会的な浸透には、それに関する数多くの出版物の存在も見逃せない。その中で、当時の衆生教化の一端を知る上で重要なのは、仏僧が観音の縁起利生譚を書き記した霊場記ものであり、浄土宗の僧、松誉巌的が貞亨４（1687）年に刊行した『西国洛陽三十三所観音霊験記』が初出である。宝永２（1705）年には、その改訂版である『西国三十三所観音霊験記真鈔』（以下、『観音霊験記真鈔』と略）が出版され、これに触発され、享保 11（1726）年には同じく浄土宗の僧、厚誉春鶯が『西国三十三所観音霊場記』（以下、『観音霊場記』と略）および、それと一対のものと位置づけられる『西国巡礼歌諺註』を世に問うことになる。厚誉のこの二書は、享和３（1803）年に出版され、天保４（1833）年や弘化２（1845）年にも再版されていく辻本基定編纂『西国三十三所観音霊場記図会』（以下、『観音霊場記図会』と略）の元本であり、後代に影響力を保ち続けた点から見ても、注目に値する書であるが、残念なことに、その研究は進んでいるとは言えない。このような状況の下、本論文では、厚誉の『観音霊場記』と『西国巡礼歌諺註』の思想的・構成的特徴を松誉の『観音霊験記真鈔』との比較において描き出し、またその後の影響を『観音霊場記図会』を通して論及することで、ツーリズム的な色彩を強め、その様態も複雑になっていく西国巡礼がどのように宗教的に位置づけられ、展開していったのかを跡づけた。

まず、第一章において、従来の巡礼研究における西国巡礼の位置づけに触れ、本論文での問題意識を明らかにした。日本での巡礼に関する研究は、民俗学、歴史学、地理学、社会学といった分野からのアプローチが主であるが、その中で西国巡礼が有する宗教的意味づけを正面から問うものはほとんど見られず、江戸時代特有の霊場記ものを取り上げた研究も十分には行われてこなかった。その逆に欧米の研究は巡礼の宗教的意味に着目するが、キリスト教圏等の直線型の巡礼との対比という観点から円周構造をもつ四国遍路が取り上げられることが圧倒的に多い。そこで、厚誉の『観音霊場記』と『西国巡礼歌諺註』を軸に、松誉の『観音霊験記真鈔』との内容比較を行いつつ、宗教的な意味づけの観点から西国巡礼の展開を追うことにしたのである。

第二章では、厚誉と、厚誉に影響を与えた松誉の生涯と著作に触れた後、『観音霊場記』が受け継ぐ寺社縁起、霊験説話等の特徴を明らかにしつつ、松誉の『観音霊験記真鈔』からの厚誉の著作への影響について論じた。

第三章では、『観音霊験記真鈔』との比較を通して厚誉の『観音霊場記』の構成上の特徴に論及した。そこでは、『観音霊験記真鈔』には本尊縁起譚しか見出せないが、厚誉の『観音霊場記』には本尊縁起譚とともに寺院縁起譚が取り上げられ、「有縁の霊地」としての特定寺院（三十三ヶ所）に空間的な必然性が生み出されていること、また、『観音霊験記真鈔』に取り入れられた縁起譚と『観音霊場記』に用いられている霊験譚では、約束される「利益・功徳」が異なり、縁起譚では来世的な利益が、霊験譚では現世の利益が保証されていることを指摘した。

第四章では、『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』の内容分析により、そこには表層の現世利益的な部分と深層の来世志向的部分から成り立っている二層構造が存在し、庶民の目を現世利益の方に向かわせ、最後には浄土世界に転換させようとした、厚誉の意図というものを明らかにした。

終章では、辻本の『観音霊場記図会』において『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』が庶民でも平易に読めるよう再構成の上加筆されているが、厚誉の二層構造による宗教的意味づけは変えられることなく、後代にも維持されていくことを結論付けた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（Sighinas Mihaela Lacramioara）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	加藤　均
	副 査　教授	嶋本 隆光
	副 査　准教授	柴田 芳成
	副 査　准教授	岩井 茂樹
	副 査　准教授	蔦　清行

論文審査の結果の要旨

西国三十三所観音巡礼が交通網の発達によりツーリズムとの結びつきを強めた江戸時代中期になると、当時の唱導僧により三十三の各寺にまつわる縁起譚や霊験譚などが書き記された、衆生勧化を目的とした霊場記というものが現れてくる。提出された論文「近世日本における西国巡礼の展開　―厚誉春鶯『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』を中心に―」は、そういった書の中で、特に浄土宗の僧侶、厚誉春鶯が享保11（1726）年に版行した『西国三十三所観音霊場記』（以下、『観音霊場記』と略記）及び『西国巡礼歌諺註』に焦点を当て、それを軸として、近世日本において西国巡礼がどのように宗教的に意味づけされていくのか、その展開過程を追う論文である。

第一章の「巡礼研究における西国巡礼の位置づけ」では、日本と欧米における先行研究を概観し、日本では西国巡礼を含めた巡礼に関する研究は、民俗学をはじめとして、歴史学、地理学、社会学など多岐にわたる分野からの考察が行われてきたが、霊場記というテキストに十分に注意が払われておらず、また、比較巡礼研究の盛んな欧米では、キリスト教圏等に見られるような直線型の巡礼形態との対比から、完全な円周構造をもつ四国八十八ヶ所遍路に関心が集中し、西国巡礼を扱った本格的な研究は少ないと指摘する。

続く第二章の「厚誉春鶯が受け継いだ伝統」では、特に、厚誉の『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』について、両書でしばしば言及され、その直接的な影響を知りうる松誉巌的の『西国三十三所観音霊験記真鈔』（宝永2（1705）年刊、以下『観音霊験記真鈔』と略記）は御詠歌の評釈を含むものであり、また、厚誉自身の言から考えても、都合により別々に刊行されたが、本来は一書を成すべきものであったと主張する。

その上で、第三章の「厚誉の『観音霊場記』及び松誉の『観音霊験記真鈔』の構成的特徴」においては、観音菩薩出現の経緯を物語る本尊縁起譚しか記載されていない『観音霊験記真鈔』と異なり、『観音霊場記』では、厚誉は本尊縁起譚と寺院縁起譚を並列させることによって各寺を観音と直接的に結び付け、巡拝を必然的に呼び起こす「有縁の霊地」とし、また、『観音霊験記真鈔』には見られない、参詣による現世の利益を物語る霊験譚を付加することで、庶民に対する巡礼への強い動機付けをおこなっていると指摘する。

そして、本論の中核となる第四章の「厚誉の『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』の思想的特徴」では、巡礼による来世での利益のみを強調する『観音霊験記真鈔』と比すれば、『観音霊場記』は霊験譚の付加や巡礼の十徳の改変などにより現世利益を前面に出したテキストとなっているが、一方で、『西国巡礼歌諺註』では、歌の語釈により仏典との結びつきを示そうとした松誉とは異なり、厚誉は各寺において極楽浄土がイメージ化できるよう歌意の解釈に重きを置き、御詠歌を阿弥陀の世界に近づく道に直結させているとする。そこには、『観音霊場記』において現世利益を語ることで庶民に巡礼への動機づけを与え、そして『西国巡礼歌諺註』により巡礼者の目を浄土世界に向けさせようとする二層構造的な考え方が見られると主張する。

終章では、『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』の両書を元本として一本化し享和3（1803）年に出版され、天保4（1833）年や弘化2（1845）年にも再版されていく辻本基定編纂『西国三十三所観音霊場記図会』（以下、『観音霊場記図会』と略）に論及する。ここで辻本は、『観音霊場記』を平仮名で書き改め、霊験譚には「近頃これによく似たることあり」として当時の出来事も付加し、また、御詠歌の評釈部分では『西国巡礼歌諺註』に基づきながら説話を多用することで、庶民の読み物として編集していくが、厚誉の二層構造を成す巡礼への宗教的意味づけは変更されることなく維持されており、後代へのその影響は無視できないと結論づける。

霊場記という巡礼テキストは、江戸時代になって初めて出てくるものでその時代の西国巡礼のあり方を理解する上

で重要なものであるにもかかわらず、これまで十分に注目されてこなかったのは事実である。また、辻本編纂の『西国三十三所観音霊場記図会』は明治期になっても再版され、歌舞伎の題材にもなっているが、その元本たる『観音霊場記』及び『西国巡礼歌諺註』に着目し、宗教的な意味付けの観点から西国巡礼の展開を跡付けようとしたのはまさに著者の卓見であろう。両書は先行研究でも一書と考えるべきとされてきたが、本論文はさらに一歩進んで、松誉の『観音霊験記真鈔』との比較を通して、『観音霊場記』では現世利益を、『西国巡礼歌諺註』では来世での利益を語る役割を担わせ、観光的要素を強めていく近世の西国巡礼の実状にあわせつつ浄土信仰にいざなおうとした浄土宗の僧、厚誉春鶯の思考や試みといったものを版本等の原書に取り組み、描き出し得たことは評価に値する。

直接の先行研究が少ない中、初出の研究と言ってよいものであるため、論点がかなり多岐に渡り、著者の考察の意図がすぐにはつかまえにくく、原文の読みや論証も十分ではない箇所が見受けられるのは残念であるが、論文そのものの学術的価値を大きく損なうものではないと判断するところである。

以上、審査したところにより、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位（日本語・日本文化）にふさわしいものであるという結論に至った。